

研究主題「豊かに学び続ける生徒をはぐくむ10教科の授業研究」
～互恵関係のある「学びの協同活動」を通して～

1 主題設定の理由

(1) 新学習指導要領及び本校の教育目標から

本校の教育目標は「自ら学び、心豊かに自己の確立に努め、たくましく生きる生徒の育成」であり、その具体的な教育活動の柱として本年度の重点を「確かな学力の向上」、「豊かな心の醸成」としている。これらの重点を達成するために、「学びの共同体」理論（学習院大学教授 東京大学名誉教授 佐藤 学）に沿った「学びの協同活動」を実践した授業改善を図っていく。また、福岡県学校教育振興プラン「鍛ほめメソッド」の実践に取り組む。

一方、平成29年3月に示された新学習指導要領の改訂の方針では、激しく変化していく社会に対応できる能力を身につける学習方法として「知識の理解の質を高め資質・能力を育む『主体的・対話的で深い学び』（アクティブラーニング）」が、大きな要素であるとされている。そこで、「学びの協同活動」を通して毎日の授業の中で生徒が自ら学び、自分の考えをまとめ、人に伝えるために様々な形で表現することが大切だと考える。

(2) 本校生徒の実態から

本校の生徒は、生活態度、学習態度ともに全体的に落ち着いており、各教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動における学習に対してもまじめに取り組むことができる。平成29年4月に行われた標準学力分析結果では、各学年、どの教科においても県平均を上回っている。しかし、観点別評価で見ると多くの教科・学年において、「知識・理解」や「技能」の結果が比較的高い一方で、「思考・表現」の結果が他の観点よりも低い傾向が見られる。そこで、知識や技能を活用して課題を解決する学習を通して思考力・表現力を育成することが課題であると考えます。

(3) 人権教育推進・太宰府市教育施策要綱の視点から

福岡県人権教育推進プラン（平成21年3月）では、「教科等指導」として、「人権教育の目標と各教科等の目標やねらいとの関連を明確にした上で、人権に関する意識・態度、実践力を養う人権教育の活動と、それぞれの目標・ねらいに基づく各教科等の指導とが、有機的・相乗的に効果を上げられるようにしていくことが重要であり、個に応じた指導を充実し、一人一人が大切にされる授業等、誰もが自分のよさや可能性を発揮し、輝くことができるような学習活動づくりに努めます」とある。また、太宰府市の教育施策要綱にも、教育の基本目標として「確かな学力、豊かな人間性、健やかな体を培い、郷土を愛する心を育み、次代を担う青少年の健全育成」とある。人権教育研修会資料（平成29年度版）には、人権教育の視点に立った授業の工夫を進めていく際の視点として「自己存在感を持たせる支援の工夫」「共感的人間関係を育成する支援の工夫」「自己選択・決定の場の工夫」が重視されている。以上のことから、豊かに学び続ける生徒をはぐくむ10教科の授業研究をしていくことは大変意義深いと考える。

(4) これまでの研究の歩みから

本校では数年来、「確かな学力の育成」を目指して、言語活動の工夫等を中心に教育研究に取り組んできた。平成26年度から3年間、太宰府市教育委員会研究指定・委嘱を受け、「確かな学力」を「思考力・判断力・表現力」に焦点化し、協同学習やアクティブ・ラーニングの理論を活かして「学び合い活動の工夫」を研究の視点とした授業づくりを進めてきた。本校が考える「学び合い活動の工夫」とは、「思考スキルパ

ターン」を活用し、活動の目的に応じて有効な「学習形態」を工夫することであり、さらに学び合いを深めるために本年度より「学びの共同体」理論（学習院大学教授 東京大学名誉教授 佐藤 学）を取り入れる。「学びの協同活動」を取り入れた授業実践を通して、授業の中で生徒同士が互惠関係のある学びをつくることを目指す。

2 主題の意味

(1) 「豊かに学び続ける生徒をはぐくむ」とは

「豊かに学び続ける」とは、本研究においては、「学びの力」が身についた生徒である。

「豊か」とは、「新しい課題に対し、多面的・多角的にアプローチしようとする意欲」であり、

「学び」とは、「新しい課題に出会ったとき、それを解決しようとする意欲（課題意識）を持ち、自分のもつ先行体験（自然体験や生活体験、既習事項）を総動員して、よりよく解決する過程及びその結果」である。

「豊かに学び続ける生徒をはぐくむ」とは、「生活や社会、環境の中に問題を見だし、多様な他者と自分の関係を築きながら答えを導き、自分の人生と社会を切り開いて、健やかで豊かな未来を創る力」（国立教育施策研究所、21世紀型能力：実践力）につなげていくことである。

具体的には、次の3つの生徒像で示される。

- | |
|---|
| ア 課題意識をもって学習に臨み、その課題意識を連続・発展させる生徒【意欲・態度】※道徳性 |
| イ 様々な情報の中から必要なものを適切に選択し、それを自分の思いや考え、先行体験と関連づけ、よりよい答えや新たな知識・技能を主体的に創り出す生徒【思考力】 |
| ウ アやイの過程や結果で得られたものを対話的活動や言語活動により、他者にわかりやすく伝えることができる生徒【表現力】 |

アの意味…新しい課題に対し、よりよく解決するために多面的・多角的にアプローチしようとする意欲をもち、その意欲が次の課題や別の課題に活用されていく身構え

イの意味…課題解決の過程で、取り出すべき情報を「正誤・適否・軽重」から選択する力
自然体験や生活体験、既習の見方・考え方を様々に関係づけて論理的に考える力

自ら課題を把握し解決方法を考え、調べたり試行錯誤したりして、よりよく解決する力

ウの意味…学びの過程で得られたものや結果として得られたものを、対話的活動や言語活動によって他者に適切（正確性・簡易性・明瞭性）に伝える力

※言語活動…言葉による表現（言葉、文章 等）

「抽象物や具象物を用いた表現」や「描画や身体を用いた表現」を取り込んだ活動

（記号、図表・グラフ、作品、制作物、図画、歌声、五体の動き 等）

なお、本時の目標や内容に応じて、「ア～ウ」のいずれか1つを主眼に置く。

(2) 「10教科の授業研究」とは

研究の場を教科に置き、「学びの共同体」理論から、生徒一人一人が主人公となり、他者との協同活動を通して多様な考えと出会い、課題との新たな出会いと対話を実現して自らの思考を生み出し吟味することで、生徒が主体的に学びをすすめることができるという点でも価値あるものである。また、「同僚性」を重視し、個々の学びに協議の視点をあてることで、中学校の教科の壁を越えて授業改善を推進するようにする。「同僚性」とは、教師が学びの専門家として、学び育ち合う関係性のことである。例えば、授業後の協議会において、話し合いの中心は教師の技術や教材の解釈でなく、生徒がどこで学んでいたかやどこで学びがつまづいたかについて意見を交流して学び合う。その点において、それぞれ教師が教科や学年を越えて生徒一人一人の学びの具体的な姿を語り合うことが大切である。

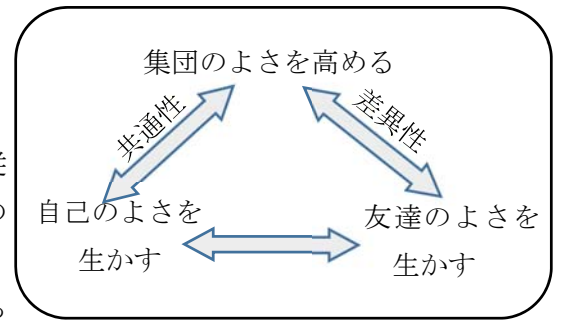
また、平成31年度からの道徳の教科化（道徳科）に向けて、「考え、議論する道徳」をキーワードに、多様で効果的な指導方法の工夫として、「対話や討論などの言語活動」・「課題解決的な学習活動」・「家庭・地域との関連化を図った活動」の3点を研究する。

3 副主題の意味

(1) 「互恵関係のある」とは

互恵関係とは、互いに利益を得る、または利益を与え合う関係のことで、「学びの共同体」理論から、これまでの「わかる・できる生徒」が「わからない・できない生徒」に教える従来の「教え合い」とは異なり、双方向性を重視し、互恵関係のある学びを図るものである。「わからない」というつぶやきを重視し、そこから生まれる疑問を「共通性」と「差異性」から「比較・吟味」することを通して、「わかる生徒・できる生徒」も「わからない生徒・できない生徒」も学びを統合したり発展させたりすることである。

なお、「比較・吟味」とは多様性・転移性のある学びになることであり、「統合・発展」とは自分なりの結論を出すことでより高次元な学びになることである。



(2) 「学びの協同活動」とは

本研究では、教科授業づくりにおいて、次の①～③の工夫をすることである。

①学びの学習過程…「課題設定→比較・吟味→統合・発展→課題向上」の学習過程を設定する。

段階	学習過程	意味・留意点
導入	課題設定	<ul style="list-style-type: none"> 前時を想起し、「めあて」をつかむ・つくる、学習環境と出会う。 先行経験とのズレ等から知的好奇心を喚起・高揚、学習への動機付けをする。
展開前段	比較・吟味	<ul style="list-style-type: none"> 自分の課題（内容・方法）を明らかにする。 学習環境から比較・吟味（多様性・転移性のある学び）して、課題解決の方法を考え、情報の収集と取捨選択を行い、実際に試行錯誤する。 思考スキルパターンの活用
展開後段	統合・発展	<ul style="list-style-type: none"> 「難・やや難である課題」の設定 学びのグループ活動を通して、思いや考えの付加・修正・強化（補充・深化・統合）を行う。 課題の目標・内容に応じて、統合や発展（自分なりの結論・より高次元な学び）を図る。 思考スキルパターンの活用
終末	課題向上	<ul style="list-style-type: none"> 本時をまとめ、自己の学びを実感する。 次時への新たな課題意識をもつ。

②学びの目標設定…「生徒にとって『難』または『やや難』である目標設定」（生徒が背伸びしてジャンプすれば解決できる課題：学びの共同体）を設定する。

〈例〉「背伸び・ジャンプの課題：学びの共同体」

- 内容を難しくした課題
 - 活用や発展（自然・社会・日常生活等）につながる課題
 - 次の単元や学年で扱う課題
 - 主眼の評価「A」基準の課題
 - 他の教科・領域と関連した課題
- 等

③学びのグループ活動…「共通性」と「差異性」から互恵関係のある交流活動を設定する。

○形態の工夫…男女各2名4人グループ（男女市松模様）を活用する。

○活動構成の工夫…「個→グループ→全体→個」の流れをつくる。

〈留意点〉

- ・昨年度までの研究を継続し、「思考スキルパターン」（教師・生徒）を活用する。
- ・本時の目標や内容に応じてペアやトリオ等を導入することもある。
- ・生徒の活動を活性化させるため、統合・発展を図る観点（課題解決を支援する操作活動やヒントカード・思いや考えの方向性を支援する発問・更に難易度の高い課題等）を用意する。

3 研究の目標

豊かに学び続ける生徒をはぐくむために、互恵関係のある学びの協同活動を取り入れた教科指導の在り方について究明する。

4 研究の構想

(1) 研究仮説

教科授業において、A 互恵関係のある B「学びの協同活動」を設定すれば、課題意識・思考力・表現力が高まり、豊かに学び続ける生徒が育つであろう。

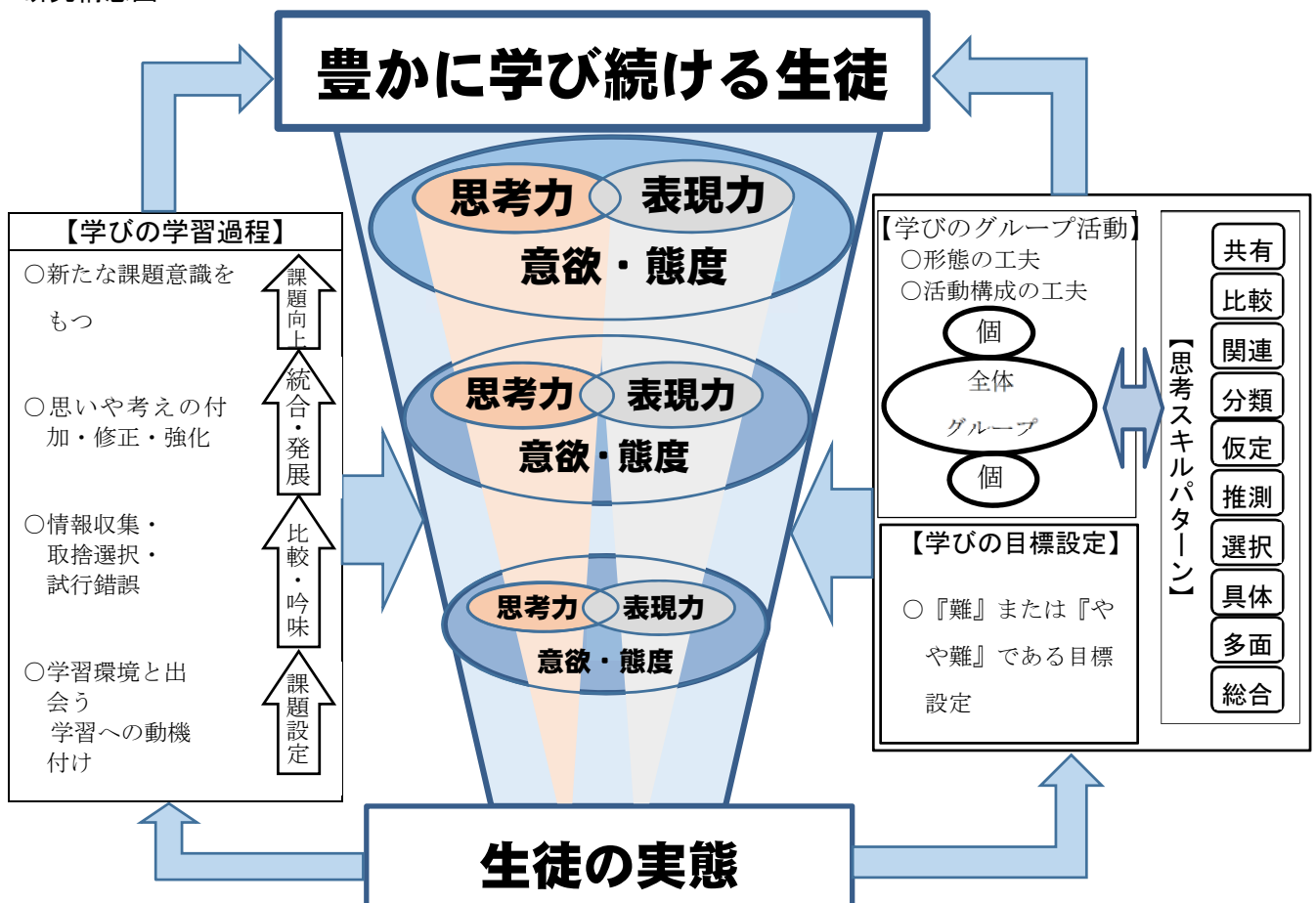
A 互恵関係のある…双方向性を重視し、考えを比較吟味して統合発展させる

B 学びの協同活動…①学びの学習過程（課題設定→比較・吟味→統合・発展→課題向上）

②学びの目標設定（生徒にとって『難』または『やや難』である目標設定）

③学びのグループ活動（形態の工夫、活動構成の工夫）

(2) 研究構想図



(3) 各教科の仮説説明の方途(各教科の具体的な構想)

〈 国 語 科 〉

1 〈 国 語 科 〉における目指す生徒像

- ア 国語に関心を持ち、既習内容を手がかりに作品を味わったり、理解を深めたり、表現を工夫したりしようとする生徒【意欲・態度】
- イ 相手・目的・場面に応じて、用いる言葉や表現を比較・選択できる生徒【思考力】
- ウ 表現や構成などを工夫しながら、発表や記述することで、分かりやすく説明できる生徒【表現力】

2 授業づくりの視点

(1) 学びの学習過程

- 読み取りに関する題材では「統合・発展の段階」で、筆者(作者)の主張や主題に対しての考えを交流させる。
- 話す・書く題材では「課題設定の段階」で、相手意識と目的意識を明確にもたせる。

(2) 学びの目標設定

- 題材の構成や表現などをつかむために、既習事項を活用する課題を設定する。
- 話す・書く題材においては、個人の考えを、より説得力のあるものへと発展させる。

(3) 学びのグループ活動

- ペアや四人班(男女混合)で行う。
- 交流する前に、個人で考える時間を設定し、自分の意見をもたせた上で、話し合わせる。
- 交流した後、再び個に戻し、新たに分かったことや考えたことをもとに、自分の考えを深める。

3 展開のポイント

	ねらい	「学びの協同活動」の工夫
課題設定	○ 伝える相手・目的・場面を考えたときに、ふさわしい表現について考える。	○ 自らの経験や既習事項をもとに、個人で考えた後、グループで意見交流をして、ふさわしい表現について確認する。
比較・吟味	○ 自分の表現をより良くするためのポイント(言葉、構成、文法など)を考える。	○ ペアやグループで、自らの考えを伝え合い、検討して、良い方法を探る。
統合・発展	○ 論点を絞り、根拠を明確にして、互いの意見を確かめる。 ○ 根拠を交流・検討することで、個人の考えにひろがりやふかまりをつくる。	○ 好き嫌いではなく、根拠の妥当性や優位性について話し合わせることで、論理的な交流活動ができるようにする。 ○ 交流の目的や解決すべき課題に応じて、グループの形態や話し合う時間を設定する。
課題向上	○ 学習内容をふりかえり、分かったことやできるようになったことを整理する。	○ 自己評価をおこない、分かったことやできるようになったことを全体で交流させ、次時につなげる。

1 〈 数 学 科 〉における目指す生徒像

- ア 数学的活動の楽しさや数学のよさを実感し、それらを活用して考えたり判断したりしようとする生徒
【意欲・態度】
- イ 既習事項をもとにして、数や図形の性質などを見だし発展させたり、見いだした性質などの真偽を判断したり、基礎的な概念や原理・法則及び数学的な表現や処理の仕方を活用したりできる生徒【思考力】
- ウ 見いだした数や図形の性質の妥当性などを、根拠を明らかにして説明したり、既習の数学を活用する手順を的確に説明したりすることができる生徒 【表現力】

2 授業づくりの視点

- (1) 学びの学習過程
- 課題意識を持たせ、根拠を明らかにしたり、よりよい考え方を判断したり、活用の手順を説明したりする数学的活動を重視し、「ジャンプ課題」へつなげる。
- (2) 学びの目標設定
- 新たな学習内容及び既習内容の習得状況をもとに、高めに設定する。
 - 結果だけでなく過程を振り返らせ、数学的な見方や考え方、表現や技能のよさも意識させる。
- (3) 学びのグループ活動
- 交流時に、数学的な視点などを示し、それぞれの考えを「比較」したり「分類」したりする視点を与える。
 - 交流する前に個で解決する時間を設定し、「ジャンプ課題」に対しての自分の考えをもたせるようにする。
 - 交流した後、再度個に戻し、新たにわかったことや考えたことをもとに自分の考えを深める。

3 展開のポイント

	ねらい	「学びの協同活動」の工夫
課題設定	○ 「なぜだろう」「調べたい」というような課題意識をもつ。	○ 身の回りにある数学的な課題や、課題の提示の仕方を工夫する。
比較・吟	○ 既習事項を活かして、新たな数や図形の性質を見いだす。	○ 発問を工夫したり、操作できるような教具を準備したりして、生徒の思考を導くようにする。 ○ 課題を数量や図形の関係などに着目して捉えさせる
統合・発展	○ 「比較・吟味」の段階で見いだした性質を発展させ「ジャンプ課題」に挑戦する。 ○ 「一人で考える時間」を確保し、その後の「グループで考えを交流する時間」で考えのふかまりやひろがりをつくる。	○ 難易度の高い課題を準備したり、主眼の評価「A」の課題を提示する。 ○ グループでの交流時にそれぞれの考えを比較したり分類したりする視点を与える。 ○ 課題提示時に考えた自分の予想と思考の結果を比較させる。
課題向上	○ 学習内容の振り返りをし、理解したことや気付いたことなどを自分の言葉で表現できる。	○ 自己評価を書かせ、できるようになったことや疑問点などを整理できるような場を設定する。 ○ 主眼達成のため、教えるべきことはきちんと教える。

1 社会科における目指す生徒像

- ア 資料収集や交流活動の楽しさを実感し、主体的に考えたり判断したりできる生徒【意欲・態度】
- イ 課題に対し、選択した資料をもとに公正に判断するとともに、交流活動を通して物事を多面的・多角的に考察できる生徒【思考力】
- ウ 調査した結果や考えたことを、三角ロジックなどを用い、他者に伝えることができる生徒【表現力】

2 授業づくりの視点

(1) 学びの学習過程

- 学習課題を設定し課題意識を持たせ、資料を収集し読み取る活動を通して、自分なりの考えをもたせる。さらにグループや全体で意見を交流する活動を通じて多面的・多角的に考察する活動へつなげる。
- 社会的事象に対し「なぜ」「どのように」という問いをもたせることを中心とする。

(2) 学びの目標設定

- 同一性・・・社会的事象の因果関係を明らかにすることを中心に設定する。
- 個人性・・・社会的事象に関する自分なりの考えをもたせることに重点を置く。
- 多様性・・・多面的・多角的に考察した結果を「違いを違いとして認める」ことを前提とする。

(3) 学びのグループ活動

- 男女混合で4人グループを基本とする。
- 学習内容に応じて、2人のグループをつくり、意見交流を行わせる。
- 学習課題に対し、資料を収集し考察する段階は原則1人で活動させ、自分の考えをもつ時間を設定する。

3 展開のポイント

	ねらい	「学びの協同活動」の工夫
課題設定	○複数の事象の比較により、課題、原因を発見し、「なぜそのようになるのか」「どのような状態なのか」といった問いをもつ。	○資料を提示し、自分なりの考えをもつことができるようにする。
比較・吟味	○課題解決に必要な資料を収集・選択する。 ○問いに対応する、自分なりの考えをもつ。	○資料の収集・選択は、原則、個人で行う。 ○多面的・多角的な調査を行うために、グループ内で役割分担をする。 ○「一人で考える時間」を設定し、問いに対する自分なりの考えをもつ。
統合・発展	○他者の考えを聞き、自分の考えと比較する。 ○全体で意見交流をし、多様な考えにふれる。 ○社会的事象に対し、多面的・多角的に考察する。	○「4人グループ」→「全体」の順で行う。発表の際には、根拠となる資料の提示を基本とする。 ○意見交流を通して、新たにわかったこと考えたことをもとに、自分の考えを再構築する。
課題向上	○課題を解決する中で、できるようになったことやわかったことを整理する。	○次時の学習で生かすために、できるようになったこと（思考・判断・表現）を全体で交流する。

1 〈 理 科 〉における目指す生徒像

- ア 自然の事象や現象に興味を持ち、進んで実験や観察に取り組んで、探究することができる生徒【意欲・態度】
- イ これまでの経験を元に仮説を立て、観察・実験の結果や資料をもとに考察することができる生徒【思考力】
- ウ 観察・実験の結果の意味することやそのつながりを、文章や図、グラフを用いて表現したり、説明することができる生徒【表現力】

2 授業づくりの視点

(1) 学びの学習過程

- 知的好奇心を喚起・高揚させて学習への動機付けをする。
- 観察・実験においては「仮説(予想)→検証(観察・実験)→考察」の流れを徹底させる。

(2) 学びの目標設定

- 生徒の生活体験・自然体験、既習事項を基に、高めに設定する。
- 実験や観察の結果から「自分自身で考察する」ことに重点を置く。

(3) 学びのグループ活動

- 観察・実験用(理科室用)のグループをつくる。男女混合で基本的には3~4人とする。
- 「考察」させるときは、「一人で考える時間」を確保し、次に「グループで考えを交流する時間」を設定する。
- 「グループで交流する時間」を通し、「正しく理解する時間」を設定する。

3 展開のポイント

	ねらい	「学びの協同活動」の工夫
課題の設	○ 課題をとらえ、仮説を立てる。	○ 生徒の「生活体験・自然体験、既習事項」から、仮説を立てられるように支援する。
比較・吟味	○ グループ活動は、グループ内で協力、分担して操作・作業し、全員が主体的に参加する。	○ 実験・観察の準備片付けだけでなく、操作・記録等を分担して行わせ、一人一役で主体的に実験・観察に関わらせる。(机上は実験器具と記録用紙のみ)
統合・発展	○ 仮説と検証から、自分自身で考察を考える。 ○ 「一人で考える時間」を確保し、その後の「グループで考えを交流する時間」で考えのふかまりやひろがりをつくる。 ○ 「グループで考えを交流する時間」の後、「自分の考えを修正し、高めていく時間」を設定する。	○ データを転記する時間を確保する。 ○ 実験結果を全体で交流・確認し、他のデータとの比較ができるようにする。 ○ 実験結果から分かったことを、「めあてに対する答え」になるように書かせる。 ○ グループの交流では、「なぜそう考えたの？」等の質問を大事にし、聞かれたら丁寧に答えるように、日常的に指導する。 ○ グループ活動においては、全員が1回は意見を述べるができるように指導する。
課題向上	○ その日の学習でわかったことや自分が気づいたことを整理する。	○ 自分が考えたことを大事にさせる。 ○ 交流において、友達の考えを聞いて、自分の考えを付加、修正させる。 ○ 主眼達成のため、教えるべきことはきちんと教える。

1 〈 英 語 科 〉における目指す生徒像

- ア 言語活動の楽しさや良さを実感し、積極的にコミュニケーション活動に取り組む生徒 【意欲・態度】
 イ 様々な表現や知識の中から必要なものを適切に選択し、場面に応じて活用できる生徒 【思考力】
 ウ 英語を用いて、自分や相手の考えや気持ちなどについて互いに伝え合うことができる生徒 【表現力】

2 授業づくりの視点

(1) 学びの学習過程

- 各授業において、「導入(課題を設定)→比較吟味(課題達成のための練習)→統合・発展(各自の課題をグループで交流)→課題向上(達成した課題を全体で交流・個人で再確認)」の学習過程の流れをつくる。

(2) 学びの目標設定

- 既習の文法事項を活用し、意欲・態度・判断・表現力(発信)を育てるための、ある場面を想定した課題を設定する。
- 活動内容や課題に応じて、目標を設定する。

(3) 学びのグループ活動

- ペア・トリオ・グループ(男女混合4人班)で活動する。
- 「課題設定」段階では、個で課題をとらえさせる。
- 「比較吟味」段階では、個、ペア、グループ、全体で課題をとらえさせ、よりよい課題解決法へとつなげる。
- 「統合発展」段階では、グループでの交流を生かし、よりよい課題解決を導く時間を設定する。
- 「課題向上」段階で、まとめとして全体で交流し、再度個に戻し、自己表現を深める時間を設定する。

3 展開のポイント

	ねらい	「学びの協同活動」の工夫
課題設定	○既習事項を復習すると同時に、課題をとらえさせる。	○課題解決のためのポイントをつかみ、課題をとらえさせるために、個・ペアで、ウォームアップとして既習事項の復習をする。
比較・吟味	○新出の文法事項の決まりに気づかせる。 ○課題を知り、課題解決について考える。	○新出の文法事項が定着するように、ペア・トリオ・グループで、パターンプラクティスや文型ドリルを行う。
統合・発展	○「比較・吟味」の段階で習得した新出文法事項を発展させ「ジャンプ課題」に挑戦する。 ○ 「一人で考える時間」を確保し、その後の「グループで考えを交流する時間」でアドバイスし合い、考えのふかまりやひろがりをつくる。	○グループでの交流では、わからなかった表現や文のルールを理解するために、ペア・トリオ・グループで質問したり、教えあったりする。 ○ペア・トリオ・グループで思考や表現を深め広げるために、考えを共有したり助言し合ったりして、課題解決に向けた学びの活動を行う。
課題向上	○学習内容をふりかえり、次時につなげる。	○グループでの活動で得た知識を用いて、考えや表現を全体で交流する。まとめとして個人で自己表現に取り組みせ、次時につなげる。

1 〈 音 楽 科 〉における目指す生徒像

- ア 主体的に鑑賞や表現の活動に取り組み、自分なりの思いを持ちながら音楽を生き生きと表現したり、音楽のよさや美しさを感じ取ったりすることができる生徒。 【意欲・態度】
- イ 音楽の諸要素を理解し、それらの働きから楽曲のよさや美しさ・豊かさを感じ取ったり、それらを活用してより良い表現を工夫したりすることができる生徒。 【思考力】
- ウ 音楽を豊かに表現するための技能を身に付け、音楽の諸要素を工夫して音楽を生き生きと表現しようとしていたり、感じ取ったこと・理解したことを自分なりの言葉で伝えたりすることができる生徒。 【表現力】

2 授業づくりの視点

(1) 学びの学習過程

- 音楽の諸要素から楽曲のよさや特徴を感じ取り、絵や言葉で表現していく。
- 自分が感じ取ったイメージをこれまでの経験や他の楽曲等と比較しながら、自分なりの思いや意図をもった表現へとつなげるために音楽の諸要素を活用しながら創造的な音楽活動へと展開していく。

(2) 学びの目標設定

- 楽曲を特徴付けている要素と関連付けながら、一人一人が主体的に表現や鑑賞活動の目標をもつ。
- 一人一人がもった思いや表現がより深くイメージに合ったものになるよう、グループで意見を相互に出し合う場面や課題を設定する。

(3) 学びのグループ活動

- 曲のイメージや鑑賞した感想を個人で考え、それらをグループで出し合う。
- 交流した意見や表現を選択したりまとめたりしながら、グループで表現を深めていく。
- イメージに合った表現になっているかグループで確かめたり、他の演奏と比較したりしながら、更によりよい表現へと深めていく。

3 展開のポイント

	ねらい	「学びの協同活動」の工夫
課題設定	○既習曲との比較や音楽の諸要素に着目することで、楽曲へのおおまかなイメージや表現意図をもつ。	○教材との出会わせ方や本時の展開にあたって、生徒自ら感じ取らせたいことを焦点化する。 ・教材との出会いの場の工夫 ・メディアの活用 ・歌詞の意味や作曲者の意図の理解 ・音楽の諸要素の違いによる聴き比べ
比較・吟味	○同じ主題による他の表現や模範演奏との比較や違い等から、諸要素に着目して、豊かな表現のための根拠を探る。	○「こんな表現をしたい」という表現の方向や、楽曲の特徴からよさや課題を見いだす。 ・自分の考えを書く ・楽譜やプリントに記入する ・モデルの提示 ・着目する要素を提示する
統合・発展	○表現を工夫し、根拠を確かなものにする活動。 ・表現したいものを表出したり、技能を使いこなしたりする。 ・リズムやフレーズによる表現の工夫 ・音色や声の響きの工夫	○音楽活動が十分に行われ、方向性が見える支援や手立てを講じる。 ・音を通しての表現の交流 ・模範演奏の活用 ・聴き比べや歌い比べ ・教師の専門的な指導 ・主体的に活動できる場づくり
課題向上	○自分の音楽価値を高める。 ・表現の良さや美しさを味わう活動	○導入の表現と比べて、終末の表現にどのような高まりがあるか考えさせる。 ・導入と終末の表現の比較 ・発表の場の設定 ・自己評価や相互評価カード等の活用

1 〈 美 術 科 〉における目指す生徒像

- ア 表現及び鑑賞の幅広い活動に主体的に取り組み、豊かに発想・構想し自分の表現方法を創意工夫したり、美術のよさや美しさを味わい感じ取ったりすることができる生徒。 【意欲・態度】
- イ 美術文化について理解し、作品のよさや美しさを味わったり、自分の心に思い描いたものを色や形・材料の組み合わせを工夫したりして、自分の思いを作品に込めることができる生徒。 【思考力】
- ウ 発想や構想したことを基に、意図に応じて表現方法を自由に工夫して表現できる生徒。 【表現力】

2 授業づくりの視点

(1) 学びの学習過程

- 発想・構想に基づいた表現や活動のよさ、工夫を大切にす。
- 自分の表したい感じや思いを大切にしたり、他者の立場を大事にしたりする創造活動（表現活動・鑑賞活動）を展開する。

(2) 学びの目標設定

- 生徒が自ら感じ取ったことや考えたことを基に主題を生み出せるような課題を設定する。

(3) 学びのグループ活動

- ペアや4人のグループを基準にする。
- 交流する前に、個人で考える時間を確保し自分の考えを持たせた上で、グループの交流時間を設定する。
- 交流後、新たに発見したことや考えたことを基に、自分の考えを深める。

3 展開のポイント

	ねらい	「学びの協同活動」の工夫
課題設定	○既習事項を復習する。 ○課題をつかませる。	○自ら感じ取ったことや考えたことを基に課題を見つけさせる。
比較・吟味	○既習事項を活用しながら、新たな表現方法に気づかせる。	○教材・材料や道具を工夫して、考えるヒントを準備する。 ○個人で考える時間を確保し、考えをまとめさせる。
統合・発展	○試行錯誤を繰り返し表現する。よりよい作品になるように工夫する。 ○交流する時間で、他者の考えを聞いたり、他者の作品を見たりして多様な考えに触れ、自分の考えや作品と比較し深める。	○表現活動が十分に行えるような支援や具体的な手立てを講じる。 ○自分の考えをグループで交流させ考えを深めさせる。 ○グループから全体で交流させて、さらに考えを深めさせる。
課題向上	○学習内容の振り返りをさせ、できるようになったことやこれからの課題を意識させる。	○学習の振り返りができるような、自己評価を工夫する。 ○ペアやグループ、全体で作品のよさを味わい、相互評価をさせ、意欲につなげる。

1 〈 技術・家庭科 〉における目指す生徒像

- ア 物づくりや家族・家庭や地域における生活の中から課題を見だし、解決しようとする生徒【意欲・態度】
- イ 実践的・体験的な学習活動を通して、課題の解決にむけて考察できる生徒【思考力】
- ウ 学習したことを実践したり、学習したことをもとに考察したり、技能や言葉で表現できる生徒【表現力】

2 授業づくりの視点

(1) 学びの学習過程

- 「自分の生活に関心や疑問をもち、課題を見いだす」→「課題について実践的・体験的な活動などを通して自分なりの考えをもつ」→「交流活動を通して考えを深める」→「課題の解決策を考えたり、生活をよりよくする工夫を考えたりする」の学習の流れをつくる。
- 身近な生活の中から課題を設定する。

(2) 学びの目標設定

- 実験や実習などの実践的・体験的活動においては、生活の中から課題を設定し、解決していくような目標にする。
- 生徒のよりよい生活につながるような目標を設定する。

(3) 学びのグループ活動

- 実践的・体験的な学習活動を多く取り入れる。
- 男女混合の4人班を基本とし、活動内容によってはペアや班編成を工夫したりする。
- 「考察」させるときは、自分で考える時間を確保し、次にグループで交流する時間を設定する。
- 交流活動や実験・実習においては、役割分担をし主体的に活動できるようにする。

3 展開のポイント

	ねらい	「学びの協同活動」の工夫
課題設定	<ul style="list-style-type: none"> ○既習事項を復習する。 ○課題をつかませる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○実物や映像を提示したり、生徒自身の生活を振り返らせ、その中から課題を見つけさせる。
比較・吟味	<ul style="list-style-type: none"> ○課題に対して、既習事項や実体験を活用しながら、自分の考えを持つ。 	<ul style="list-style-type: none"> ○教材・教具を工夫し、実生活を想起しやすいようにする。 ○自分で考える時間を確保し、考えをまとめさせる。
統合・発展	<ul style="list-style-type: none"> ○交流する時間で、他者の考えを聞いたり、他者の作品を見たりして、自分の考えや作品と比較する。 ○全体で意見交流し、多様な考えにふれ、考えを深める。よりよい作品にする工夫を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ○グループでの実践的・体験的な活動を取り入れる。 ○自分の考えをグループで交流させ考えを深めさせる。 ○グループから全体で交流させて、さらに考えを深めさせる。
課題向上	<ul style="list-style-type: none"> ○学習内容の振り返りをさせ、できるようになったことやこれからの課題を意識させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○学習の振り返りができるような、自己評価の形式を工夫する。 ○ペアやグループを活用した相互評価をさせ、意欲につなげる。

1 〈 保健体育科 〉における目指す生徒像

- ア 運動の楽しさや健康の意義等を発見し、興味や関心を高めて課題の解決に向けて粘り強く取り組んで考察して修正したり、新たな課題を設定したりしようとする生徒 【意欲・態度】
- イ 自己の課題に応じた運動の行い方の改善すべきポイントを見つけたり、運動の実践の場面で練習方法を選んだりすることができる生徒 【思考力・判断力】
- ウ 運動実践の場面で思考・判断したことを根拠を示しながら仲間に伝え、表現することができる生徒 【表現力】

2 授業づくりの視点

(1) 学びの学習過程

- 運動の楽しさや健康の意義を味わわせながら、習得した知識・技能を活用して、易しい運動から次第に難しい課題へと発展させ、運動の実践により成果を確認させる。
- 知識・技能の習得・定着に向けて、各授業で学び合い・教え合い活動を取り入れる。

(2) 学びの目標設定

- 個人やグループの能力に応じて目標を設定させる。
- 自分やグループの実態から、それに見合った練習方法や作戦などを考えさせ、やや難しい課題や目標を達成できるよう意識させる。

(3) 学びのグループ活動

- 個人の振り返りやグループノート、学習カード等を使って意見を出したり比較したりしやすくする。
- 次第に難しくしていく課題に対して、個人の課題でもグループ学習や教え合い活動を取り入れ、仲間と共に課題を解決していくようにする。
- グループやペアでの教え合い活動において、技能の視点を明確にすることで、お互いのよさや助言をより具体的に伝えられるようにする。

3 展開のポイント

	ねらい	「学びの協同活動」の工夫
課題設定	○学習のねらいや既習の学習内容から課題意識を持たせる。	○映像や資料を提示したり、前時までの学習内容を振り返ったりすることで、学習への動機付けを行う。
比較・吟味	○既習の学習の振り返りや体験活動を通して、課題解決の見通しを持たせる。	○個人ノートやグループノートを活用して振り返らせたり、モデルの動きとの比較を行ったりすることで、課題解決の過程を明確にする。
統合・発展	○練習の仕方を工夫したり、交流し合ったりして、課題解決に向けて取り組ませる。 ○教え合い活動を通して個人やグループの課題を解決し、より難しい課題への意欲を持たせる。	○教え合い活動を中心とした課題解決学習を行い、伸びを実感させながら課題に応じた発展学習につなげる。 ○技能が向上した生徒を教え合いの際の教え手として技能を伝達し、課題に応じた練習方法を提示したりする。
課題向上	○理解したことや身に付いたこと、気付いたことやできるようになったことなどを自分の言葉で表現することができる。	○個人の振り返りを行った後に、グループ交流を行い、各自の技能の向上に生かすことができるようにする。 ○互いの頑張りを認め合ったり、評価したりして、自己有用感を持たせる。

1 〈 道 徳 科 〉における目指す生徒像

ア 課題意識をもって学習に臨み、その課題意識を連続・発展させる生徒 【意欲・態度】※道徳性

- アー a それぞれの場面において、善悪を判断したり、どのように対処することが望まれるかを判断したりする力を高める生徒【道徳的判断力】
- アー b 善を行うことを喜び悪を見逃すことなく、よりよい生き方を志向する感情を高める生徒【道徳的心情】
- アー c 道徳的判断力や心情を基盤とし、道徳的価値を実現しようとする意志を高める生徒【道徳的実践意欲】
- アー d 道徳的判断力や心情に裏付けされた具体的な行為への身構えを高める生徒【道徳的実践態度】

2 授業づくりの視点

「対話や討論などの言語活動を重視した指導」・「課題解決的な学習や体験的な学習を重視した指導」・「家庭・地域と連携した指導」にすため、「多面的・多角的」に考えるよう工夫し、「一般的回答（1つの正解）」を求めず、納得解（自分なりに考え抜いた『答え』）を求めず「授業」への転換を図る。

(1) 学びの学習過程

- 課題設定…生徒にとって身近な題材や体験的な題材、地域に係る題材等を用意し、課題意識を高める。
- 比較・吟味…資料の内容（主人公等）を自分に当てはめ、自分との関わりで考えさせる。（自我関与）
- 統合・発展…資料から離れ、道徳的価値について、自分自身の生き方の振り返りや身近な社会的課題等から考えさせる。（自己内対話）
- 課題向上…本時を振り返らせ、成長を実感したりこれからの課題や目標に結びつけたりさせる。

(2) 学びの目標設定

- 基本発問は3～4つ程度にし、その中に主眼に迫る中心発問（中心場面、ねらう価値を追求させる発問）を設定する。また、「資料の活用類型（4つ）」を基に、「納得解」を追求する発問構成にする。
- 「背伸び・ジャンプの課題」として補助発問（意図する内容に向けて、角度を変えたり焦点化したりするための発問）を工夫する。また同時に、思考を活性化する話し合い活動等を設定する。
 - ・広げる発問…多面的・多角的な見方を育てるためにより多くの考えを引き出す。
 - ・深める発問…資料の人物のものの見方や考え方（真意）を追求させる。
 - ・切り返しの発問…生徒の「かくあるべきだ」的な発言（立前）を揺さぶって、自分自身の気持ちや考えを深化・発展させる。

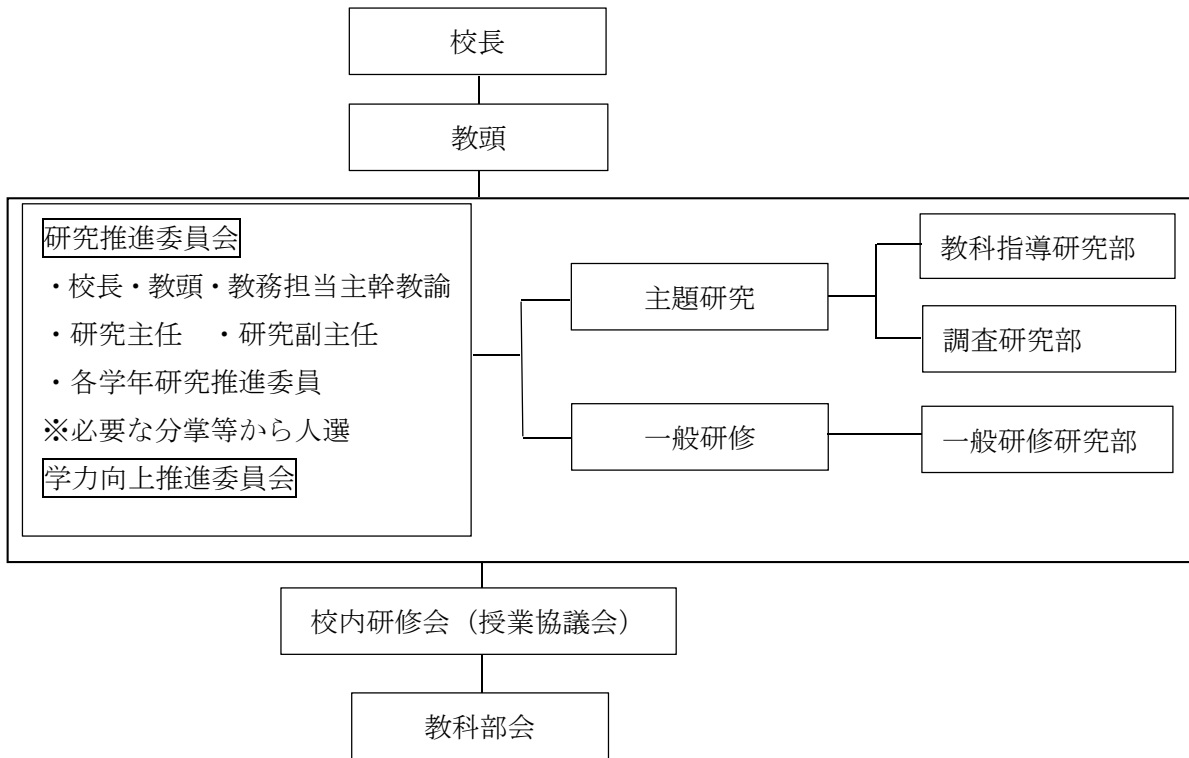
(3) 学びのグループ活動

- 男女市松模様の4人グループで、多面的・多角的に話し合ったり議論したりする場を、展開段階に一つ以上設定する。
- 葛藤や衝突等が生じる場面で、多面的・多角的に議論させ、自己内対話の活性化を図る。また、考えたこと、感じたことを発表・表現させ、特に、自分と異なる意見に向き合わせることを重視する。

3 展開のポイント

	ねらい	「学びの協同活動」の工夫
課題設定	○ 主題に対する興味・関心の高揚 学習への動機付け	○ 生徒の体験を重視し、課題意識を高める工夫をする。 (例)・体験活動のVTR提示、アンケート結果提示等、体験の想起 ・「身近な社会的課題」・「モラルジレンマ資料」・「問題解決的資料」・「批判的活用資料」等の選定・開発 ○ 「めあて」を設定し、生徒の主体的な学習にする。
比較・吟味	○ 資料を通して、ねらいとする道徳的価値の追求、把握	○ (必要に応じて) 2～4人のグループを活用する。 ○ 主人公(等)の心情・判断を自分のこととして捉える「背伸び・ジャンプの課題」を工夫する。(自我関与) (例)・主人公(等)の心情を追求させるための発問(根拠を問う発問) ・疑似体験的な活動 ・対立討論や立場討論、対話活動の設定 ・日常生活から類似場面をVTR等で紹介(体験の想起)
統合・発展	○ ねらいとする道徳的価値の内面的自覚 → <u>価値の一般化</u> ※資料から離れる	○ (必要に応じて) 4人グループを活用する。 ○ 多面的・多角的に考え、「納得解」を求める「背伸び・ジャンプの課題」を工夫する。(自己内対話) (例)・自然・社会との関わりや、時間軸・空間軸から納得解を求める発問・自分の類似体験を想起させる発問 ・実態調査等、各種データの提示と考察 ・これまでの自分(統合)とこれからの自分(発展)
課題向上	○ ねらいとする道徳的価値についての考え方の整理 実践への意欲化	○ 主眼(「ア～a～d」から一つ選択)に合わせた「自己評価」欄を設け、自己の振り返り・まとめと教師評価の補助資料とする。 (例)・教師の説話や映像資料 ・児童生徒の作文等の紹介 ・道徳ノート記述や手紙作成・創作等 ・自己評価

5 研究組織



6 平成30年度 校内研修年間計画

月	主題研究	一般研修
4	○「仮説解明の方途」研究	○特別支援教育に関する研修 (配慮を要する生徒の確認) ○生徒指導に関する研修
5	○全体授業研究会 1人1回の授業公開	
6	○学年別授業研究会	
7		○人権・同和教育について ○特別の教科 道徳の授業づくり
8		○不登校問題 ○人間関係づくり活動 ○不祥事防止について
9	○研究発表会	○県外視察の報告 (ミニ研修)
10	1人1回の授業公開	○人権・同和教育の推進と科学的認識
11		○道徳の教科化について (ミニ研修)
12		○危機管理・クレーム対応
1	○学年別授業研究会	○年度末アンケート
2	○研究のまとめ	○県外視察の報告 (ミニ研修)
3		○県外視察の報告 (ミニ研修)

※先進校視察…県外OK